

聖地リラの僧院を誇り薔薇の咲き乱れる国  
ブルガリアの旅 ソフィア、リラ、カザンラク、ヴェリコ・タルノボ

二〇〇二年四月二日～四月一日

ソフィアではフロントで貰った地図を頼りに市内探索にかけたが、文字がキリル文字なので何処を通って何処までいったのかよく判らない。古い大きな教会までたどりついたので地図と照合するとアレキサンドルネフスキー寺院らしいと思っていたが、後日そうではないことが判った。実は聖ネデリア教会でブルガリア正教の教会であった。丸屋根に鶯が絡まっていたのとジブシーの子供にしきりに銭をねだられたのが印象に残っている。子供の傍らにはケバケバシイ装いの母親もいた。

ジブシーについては若干整理しておく、ジブシーはヨーロッパから中近東、アメリカまで古来広く分布する放浪民族。起源は明確ではないが、言語、生活様式からインド北西部の下層民族とみられ9、10世紀頃からヨーロッパの記録にしばしば現れ、14、15世紀にもっとも多く、現在も総数五百万人、ヨーロッパだけで百万人以上と推定される。純粋種は皮膚は褐色、髪は黒か黒褐色、平均身長一六五cm程度、数家族、数十家族でテント、幌馬車の移動生活を送り、その社会は閉鎖的で固有の言語、宗教、慣習を維持し、部外者との通婚も禁止される。歌舞や曲芸の辻興行、馬匹売買、鍛冶屋花売り、占い等を生業と



ブルガリア正教会

する。『学研 現代新百科事典より』

一部に掏摸、置き引き、窃盗等をするものがあり観光客が被害に会うことが多い。一説にインドからエジプトに渡り各地に拡散したからジブシーと呼ばれるようになったという。ルーマニアのシビウにはジブシーの総元締めを行う「皇帝」が居住しており、闇の行政府を保有しているといわれる。

今回の旅行中にルーマニアの街道筋でも目撃したが、豪勢な邸宅を構えて定住する者も最近見られるようになった。いわれて、よく観察して見るとケバケバシク飾った建物には窓がついておらず、庭に粗末な建物が建っていたりする。母屋には馬匹を住まわせ、庭の粗末な小屋に人間が生活するのだという。都会では一般人と変わらない装いをしている者もあり、そうした連中を外見からは見分けにくいことが多く、観光客がカモにされる。子供達は就学しない者が多く、生活環境の影響を受けて掏摸、置き引き、窃盗を悪事と考える規範意識が皆無である。

ソフィアの南方にバスで約1時間半走行するとリラ山脈の山中にリラ僧院がある。突然視界に飛び込んだ僧院は白と茶色の或いは白と黒色の織りなす縞模様美しくアーチ型の柱が更にその美しさを引き立てている。このあたりで標高は1,000mを若干超えている。折から背面にそそり立つ山頂には雪が積もり僧院の佇まいを荘厳なものに仕立て上げていた。日本では桜も散り始めた4月だというのに肌吹く風は身を刺すように冷たく手袋がないと指先がか



リラの僧院

じかんでしまいそうである。

異民族との攻防が激しく栄枯盛衰の目まぐるしいブルガリアの歴史の中にあって、第二次ブルガリア帝国が輝いたのはイバン・アセン2世（在位一八一八―一八四一）の時であるが、このときリラの僧院も当初は城砦として建設され、次第に僧院の形が整えられてきたのである。爾来ブルガリア正教の聖地として国民の崇拜を集めて今日に至っている。ブルガリアの歴史の中には異教徒のオスマントルコの支配を受けた500年間の苦難の時代があったがこのときもこの僧院だけは破壊されることもなく、別格の扱いを受けてきたのだという。現在、この僧院は男子修道士25人によって守られているが、価値観が多様化してきた現在、若人で修道士になるものが少なく細々と法灯を絶やさぬよう守護しているのが実情であるという。しかしながら国民の崇敬的となつていいる場所には変わりがない。

聖ペトカ地下教会はオスマントルコの治世下にあつた14世紀に建てられたものであるが、屋根だけを地表に出した半地下式の教会で当時肩身の狭い思いをしたキリスト教徒の苦難の時代が偲ばれて痛々しい。セルデイカの遺跡は地下鉄工事の時偶然発見されたローマ帝国治世下の2世紀のものである。これは市の中心部を取り囲むように約500m四方に渡つて高さ12mの城壁が巡らされたものの一部であると考えられており、この遺構の一角は土産物屋の店舗になつていいる。

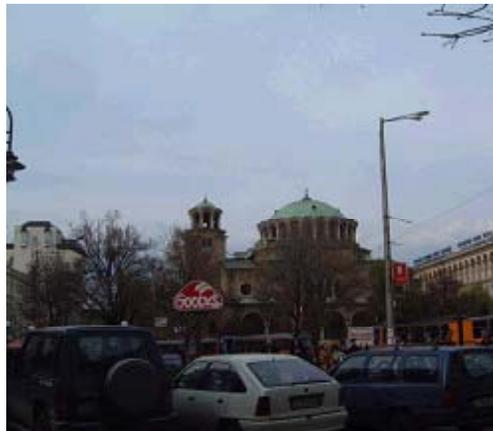


聖ゲオルゲ教会

つていいる日干し煉瓦を積み重ねて作った聖ゲオルゲ教会は4世紀にローマ帝国によつて建てられたものであるが、保存状態は良好で周囲を取り囲んで建つていいる近代的なビルと奇妙な対照を見せていて面白い。またこの教会の裏には浴場跡や市街地の跡が残されているがこちらは所謂ローマ遺跡であつて完全な形の構造物は残されていない。

大統領府では衛兵交代を目撃することができた。脚を水平にはね上げて歩く姿は一つの型なのであろうが、観光客を意識した振り付けがなされているような気がした。

国立美術館はかつての王宮であるし、シリア正教教会、アレキサンドルネフスキー教会等ソフィア市で見べき施設がこの地域には目白押しに並んでいる。6世紀に建てられたソフィア教会にはキリル文字を考案したマケドニア出身の僧侶キュリロスとメトディオス兄弟のイコンが飾られてあつたのが印象に残つた。キリル文字はロシア文字の原型となるもので、9世紀にブルガリアでギリシヤ正教の伝道僧であつたキュリロス（弟）とメトディオス（兄）の兄弟が布教のために聖書を古代教会スラブ語に翻訳する際スラブ語アルファベットを考案し、表記に用いたとされている。



ネデリア教会

朝目が覚めて窓を開けると雪が降つていた。今日は長駆してカザンラクを経由し古都のヴェリコ・タルノボまでの移動である。

カザンラクはバルカン山脈とスレドナ・ゴラ山脈に挟まれた薔薇の谷の心地である。この地域はブルガリアの中心に位置し温暖で乾燥した空気が薔薇の栽培に適しているため、古来薔薇から採れる香油の産地として有名である。香水の原料として使われる薔薇の香油の世界市場の8割をこの地方が占めている。

生憎時期が早すぎて、花はまだ咲いていなかったが周辺の田畑には一面に薔薇が栽培されているのがよく観察できた。5月の収穫期には畑一面が色とりどりの薔薇の花で埋めつくされ、夜明け前から採集が始まるのである。民族衣装を纏った女性達が歌と踊りで豊作を祝う「バラの祭典」はこの頃約一週間に渡って開催され、世界中から観光客が押し寄せ賑わうのだという。

我々の一行は薔薇博物館を見学した。博物館と名付けるには恥ずかしいほどの小規模な施設であるが、薔薇の香油の製造工程の写真や昔使われた蒸留釜や道具が展示されている。庭には品種改良のための温室なども設置されているが、ここでも花はまだ咲いていなかった。

ついでトルベト公園内にあるトラキア人の墓を見学した。一九四四年に防空壕建設中に偶然発見されたものであるが、紀元前4世紀後半から3世紀頃のものとして鑑定されており、墓の内壁と天井にフレスコ画で戦闘場面や葬送儀礼の様子が数種類の色使いで描かれていて保存状態も良好である。実物は鑑賞できないが精巧に複製されたレプリカでその絵を鑑賞することができる。

このトラキア人はブルガリアに紀元前19世紀〜8世紀頃住み着いたインド・ヨーロッパ語族である。この地域には田畑の中に小高い丘の形をしたトラキア人の墳墓が幾つか残されており我々もその幾つかを通過中に目撃することができた。

とここで現在のブルガリア人の原型はこのトラキア人ではなく、5〜6世紀に移動を開始したスラブ民族に属する西シベリアのステップ地帯の遊牧民ブルガール人である。彼等はピサンチン帝国と領土争いを繰り返しながら六八一年に第一次ブルガリア帝国を建設したのである。



トラキア人の墓地の天井絵

時期尚早なのでバラの谷では薔薇の花を見る事が出来ず残念であったが、一見桜かとまがうばかりの白いブルンの花がそこここを盛りと咲き誇っていた。ここには人通りも少なく閑静で長い閑な農村の風景が広がっていた。

バラ谷を画するシブカ峠は1878年の露土戦争でロシアとブルガリアの連合軍がトルコ軍を打ち破り歴史的勝利を飾った場所であるが、ここには戦死した息子達の霊を弔うためにロシア人遺族達が資金を出し合って建立したロシア正教のシブカ教会が葱坊主のような塔を陽光に輝かせて佇立していた。

夕刻にヴェルコ・タリノボに到着し投宿した。ヴェリコ・タリノボは一一八七年〜一三九三年に第二次ブルガリア帝国の首都として栄えた古都である。バルカン山脈の東部に位置し森に囲まれた幾つもの丘とその周囲を蛇行するヤントラ川の切り立った崖が独特の景観を作



バラ産業博物館

り出しており複雑な地形が入り組み起伏に富む立体的な市街地は中世の面影を残す町並みが至るところに展開している。イヴァン・アッセン王の治世下の最盛期にはピザンチン帝国をも圧倒し、バルカン半島のほぼ全域を支配したこともあった。当時は文化の中心地として栄え、ルーミアやモスクワからも留学生がやってきたといわれ、現在でも学都として知られている。ツアレヴェツの丘には第二次ブルガリア帝国時代に宮殿が営まれていたが、オスマン・トルコの猛攻を受けて瓦礫の山と化してしまつて史跡として残されているだけである。



イヴァン・アッセン王のモニュメント

この街で最高級のホテルであったが、部屋の高窓からヤントラ川を隔てて正面にイヴァン・アッセン王のモニュメントを見ることができた。

荷馬車が往来する長閑な田園風景  
アの旅 ブカレスト、シナイア、ブラン村、ブラシヨフ、スチャバトウルチャ

、ルーミアニ  
二〇〇二年四月二日～四月一三日

朝8時前に出発して一路ルーミアの首都ブカレストを目指した。道中窓外に広がる街道筋の民家を座高の高いバスから庭の中までつぶさに観察することができ

た。農村地帯なので一様に二階建ての母屋を囲んで庭があり、庭には必ずと言っていいくらい数羽の鶏が放されて長閑に草や地虫をついばんでいる。傍らにはプルンの木が数本植えられ白い花が満開である。



どの家にも井戸が掘ってあり井戸には屋根が設けられている。水道はまだ敷設されておらず井戸水に頼っているようである。赤茶色の瓦葺きの屋根の軒下の壁面には薪木が積み重ねられている家が多く、ガスもまだ使用されていないことを窺わせる。

道路には馬車の荷車に干し草などの荷を満載して往来している。時に二頭立ての馬車もあり、農場へ作業にでかけるのである。空の荷車の上には2、3人の農夫や農婦が所在なげに乗っており、すれ違う我々のバスを興味深そうに見つめている。行き交う自動車の数もそう多くはない。

こうした長閑な田園風景は日本の社会から消えて久しいので一際旅情をそそってあまりある。

そして不思議なことに13日間のブルガリア、ルーミア滞在中にモーターバイクが走行しているのを一度も目撃したことがなかった。

長い道中、ガイドから聞いたブルガリア人の生活水準について纏めておく

と、自由化以降貧富の格差は大きくなってきているが、平均的な月収は百五十\$、二百\$であるという。

ソフィア市内で感じたことの一つに多分社会主義の時代に建てられたと思われる無粋なデザインのアパート群の壁面の剥落や傷が目につくことであった。傷むに任せて補修が全然できていないのである。このことはアパートだけに限らず、多くの建築物が薄汚れているか壁面の剥落が目立ち補修したり化粧直しをした形跡が窺われないのである。キューバ、ドレスデン、ブラハ、ブタペスト等旧社会主義国家の都市で感じたことと同じことがここにもあったのである。言ってみれば社会主義が残した負の遺産がいまだに払拭されずに醜い姿を晒しているのである。生活に追われて補修にまで金が廻らないということなのであるうか。

ドナウ川畔の国境の街ルセには10時50分に到着した。川を超えると向かいにはルーマニアである。ブルガリア側とルーマニア側でそれぞれ出国と入国の審査を受けて越境した。

ルーマニアに入ったところで待機していたルーマニアのバスに乗り換え、3日間同行した現地ガイドともお別れである。

ルーマニアのガイドはアリーナさんという若い女性で日本語を目下勉強中であるという。歓迎の挨拶は日本語であったが、細部にわたってのガイドを日本語ですることはまだできないようので添乗員に英語で説明しこれを日本語に通訳する形をとらざるを得ない。

ルーマニアに入ったとたん、今まで一様に瓦葺きの屋根であったのが一樣にトタン葺きの屋根に変わった。家の造りや佇まいはブルガリアのときと変化がないのでこの屋根の変化は異様に思えた。ガイドに何か理由があるのか説明を求めたが判らなかつた。今でも不思議に思っている。

ブカレストで最初に訪問したのは「国民

の館」である。かの悪名高いチャウシエスク大統領が一国の威信をかけて一九八三年に着工し一九八九年に失脚するまで建設に執着した宮殿である。素材は大理石を初め全てルーマニア産のものを使い、1ヶ年間の国家予算にも匹敵する程の巨費を投じた。日本円で約一千五百億円に相当するという。その規模たるやアメリカ国防省のペンタゴンに次いで世界第二位、ヨーロッパでは第一位になるという巨大な建物である。遂にこの建物の完成を待たずして彼は失脚してしまつたが、贅を尽くした宮殿内部の装飾には天井から壁に至るまで純金が用いられていて目を見張らせるものがある。内部を見学してみると「国民の館」とは名ばかりで私欲を満たし権力を誇示するためだけの目的でつくられたものであることがよく判る。自由化後は無用の長物となつてしまつたが、巨費を投じた建物だけに野晒ししておくわけにもいかず、ルーマニアの素材と技術で作りに上げた建築物であるということから「国民の館」という名称はそのまま引き継ぎ、貸し事務所、貸し室として利用されることとなり、現在では国会議事堂が内部にあり、各政党の事務所が入居している。国際会議やコンサートにも利用され、また観光物件として運用されているのである。部屋数は三千百七室もあるという巨大な建物である。

国民の館を起点として約4kmにわたつてブカレスト市内を走り抜ける大通りが「統一大通り」である。パリのシャンゼリゼ通りと寸分違わぬ幅と長さにしようとしてチャウシエスクが計画したもので通りには豪華な、かつての



国民の館

政府高官用のマンションが建ち並んでいる。現在では転用されて裕福な一般市民が住んでいるが、この大通りを建設するためにブカレストで最も古い旧市街は破壊されてしまい多くの史跡や歴史的建造物が消滅してしまった。

チャウシェスクという政治家について調べてみると、一九一八年生まれで一九三六年に共産党に入党。一九六五年以降書記長、一九六七年以来国家評議会議長（74年以来大統領）を兼任した。国家・党・軍の実権を掌握して独裁権力を振るい、ソ連とは一線を画した自主路線をたどり、71年の米中接近では「橋渡し外交」さえ展開した。しかしながら国内では一族約20人による高位高官独占支配を行い厳格な警察国家体制を敷いた。経済的には70年代後半に急増した対外債務返済のため、国内の産出物は農産物を初め目ぼしいものは全て輸出に向け国民には耐乏生活を強制した。更に農業不振は基本的な食料確保すら危うくした。こうした中、彼は国民の不满をそらせるため西部のトランシルバニア地区に住むマジヤール系少数民族に対する抑圧を強化してハンガリー及び西側諸国との間に摩擦を引き起し政権基盤を揺すぶられることとなった。こうした中、89年の東欧での一連の変革の波を受け、西部のティミショアラでの反政府のデモ隊と治安部隊との衝突が起き、全国的な規模に発展していった。やがて兵士が市民に合流し89年12月22日、チャウシェスク夫妻が逮捕され24年間の独裁政権は崩壊した。12月25日には非公認の軍事法廷で夫妻は死刑の判決を受け即刻銃殺された。

チャウシェスクの統治方法を仔細に調べてみると現在の北朝鮮の金正日政権と似通っており、金政権は近い将来ルーマニア型の革命で崩壊するであろうことが予見される。国民を飢餓線におき言論の自由を統制する秘密警察国家は必ず破綻をきたすのは歴史の鉄則だからである。

ブカレストでは大司教教会、旧国会議事堂、革命広場、旧共産党本部、歴史博物館（旧王宮）、大学図書館等の建物を外から外観だけ見学してブカレスト市内の観光を終えた。

旧共産党本部にはチャウシェスクが群衆を前に最後の演説を行い、はじめてブーイングが起こつて反政府の大合唱となつたといわれるバルコニーはそのまま形で残つていた。劇的な終焉で消え去つた独裁者の生涯を想うと感慨一入であつた。因みにチャウシェスクはこの場での演説中に群衆の怒りを抑えられなくなり、ヘリコプターで一時的急場を脱出したのである。



チャウシェスクが演説中にブーイングの出した共産党本部のバルコニー

ブルガリア市内を朝出発して次の目的地シナイアへ向かつた。シナイアへ向かう道中、田畑の中に石油採掘の小さな油井にポンプが設置されて石油を汲み上げているのを何力所かで目撃した。それはそれは小規模の装置であつたが、ルーマニアで石油が採取できるのは小さな驚きであつた。

シナイアはカルパチア山脈の南端の山麓に開けた「カルパチアの真珠」と別称されるリゾート地である。ここにはシナイア修道院とペレシユ城がある。最初ペレス城を見学した。この城はルーマニアでは初めてのドイツ系の国王カール1世（一八六六―一九一四）が夏の離宮として19世紀に建設した優雅な城である。折から雪がちらついており、城へ到着した時には雪に覆われた森の中に尖塔が見えられ、その佇まいは優雅で一瞬ドイツのノイシュバンシュティン城に似た造りだなと感じた。雪道を城の構内まで行き、近くから城を色々な角度から鑑賞しかつ撮影した。雪化粧をした森を背景に佇立する城を仔細に観察するとノイシュバンシュティン城とはまた趣を異にする格別

の光景であった。雪が城を引き立てていた。この城ができてからブカレストの貴族達は競ってこの地に別荘を建てたのである。爾来この地は別荘地として発展した。この城から近い場所にシナイアの修道院がある。シナイア修道院は17世紀にワラキアの王侯ミハイル・カンタクジノがエジプトのシナイア山へ巡礼をし、感激して帰国後この地に修道院を建てシナイア山の名を貰って命名した修道院であり、以後この地の地名となったという謂われが残されている。

次いでトランシルバニアアルプス山中のブラン村にある通称「ドラキユラ城」を見学した。この城はワラキア公ブラド・ツエペシユ（在位一四五六―一四六二）祖父が居城とした城で後にルーマニア王室の離宮として使われたこともある。ドラキユラ伯爵と通称されるツエペシユは実際には子供の頃一度だけこの城を訪れたことがあるだけであるという。

ツエペシユはシギショアラの町に1431年に生まれ、コンスタンチノーブルに留学中にビザンチン帝国が1453年に滅亡し、支配者となったオスマントルコのメフメト2世の捕虜となった。やがて許されて帰国し、ワラキア公国の支配者となるが、約束であったトルコへの貢納金の支払いを拒否し、スルタンから派遣されてきた兵士を捕らえ生きたまま串刺しにしたことから「串刺し公」と綽名された。歴史上は敵国のトルコと勇敢に戦った名君として評価が高い。ドラキユラの名は彼の父が神聖ローマ帝国皇帝から受けた「龍（ドラゴン）が彫られたメダル」に由来する。彼の父はドラゴンのメダルを授与されたことからドラクル又はドラキユラと呼ばれ、その名が子孫の家名となったのである。また「ドラク」はルーマニア語で「悪魔」を意味している。「吸血鬼ドラキユラ」は彼の行状を年代記で読んだアイルランドの作家ブルム・ストーカーがヨーロッパに古くから伝わる吸血鬼伝説を組み合わせて怪奇小説に仕立てあげたもので、この作品の影響を受けてこのブラン城もいつしかドラキユラの城として一人歩きを始めたのである。

ブラン城を見学後再びバスで今夜の宿泊地ブラショフへ向かった。ブラショフはルーマニア第二の都市で中世の町並みを残した美しい古都である。町は12世紀にドイツの商人によって建設され、ルーマニア人、ハンガリー人の3民族によって発展してきた。閑静な佇まいのどことなく心の落ち着く感じがする町である。ここでは夕闇せまりかけた頃徒歩でスケイ門、黒の教会、聖ニコラエ教会等の外観見学をした。

ルーマニアの最北部、ブコヴィナ地方の中心都市スチャバへ向けて出発した。スチャバは一三八八年にモルドヴァ公国の首都がおかれ一五六五年にヤシに遷都するまで大きく発展した古都である。カルパチア山脈の山間を谷越え山越えの延々4時間に及ぶ長丁場のドライブであった。このあたりでは一面雪景色で戸外は肌を突き刺すような寒気である。道中、庭先に大きな木樫に重石を乗せてキャベツの漬け物を作っている光景を目撃することができた。また入り口の門と庭の中にある井戸には豪華な屋根が作られており、事情を知らなければ井戸は宗教的な施設ではないかと勘違いしそうな趣のある独特の飾りつけである。

夕方早い時間にスチャバに到着し大城砦を遠望してからホテルに投宿した。大城砦はモルドヴァ公国の初代のペトウル1世が1388年にゴシツク様式の城砦を築き、ステファン大公の時代の時代に円形の見張塔が増設され難攻不落の堅固な城に完成したのである。とても寒い日で



ドラキユラ城

この城ができてからブカレストの

あつたが五つの修道院の見学に終始した。アルボーレ修道院、スチエヴィツァ修道院、モルドヴィツァ修道院、フモール修道院、ボロネツ修道院の順に見て廻った。これらの修道院は16世紀初頭にモルドヴア公国のシユテファン大公、ボゲダン2世、ペトウル・ラレシユ公等の歴代名君の治世下に建設されたもので外壁を埋め尽くす鮮やかなフレスコ画が見物である。オスマントルコとの戦争の場面や聖書の場面が描かれていて。雨風に晒され太陽の光をあびながら色褪せることもなくよく保存されたものだと不思議な気持ちをした。勿論長い年月の間に落書きされたり剥落したりして傷んでいる箇所も沢山あるが、色鮮やかに中世文化の様相をよく現在に伝えていている。これらの壁画は文字の読めない中世の農民達の敬虔な信仰生活を偲ばせてあまりある。



アルボーレ僧院

出発までの待ち時間にホテルの前にある小さな教会へ入ってみた。すると一人一人いない薄暗い室内の一段と高い台の上の舟形の柩が設置されていて中には男の老人の遺体が仰臥の状態であつたが、両手は胸の上で組み合わされていて。遺体の顔を常時むき出しにして参会者に別れを告げさせるのがルーマニア正教の葬祭儀礼であるというが、異教徒の我々には異様な感じを与え散した。それを追いかけるように教会の鐘が大きな音で十数回も高らかに打

ち鳴らされた。時を知らせる鐘なのか葬儀が始まるという合図なのか定かではない。

バスは本日の宿泊地ドロジャ地方のトゥルチャへ向けて出発した。途中、一五六五年にモルドヴァ公国の首都が置かれ、文教都市として近世ルーマニアを代表する都市として栄えたヤシの街へ途中立ち寄るものの、終日をバスの中で過ごす移動日である。

一昨日から昨日までに駆け抜けてきた環境条件の厳しいトランシルバニア地方やブコヴィナ地方に比べ現在走行しているモルドヴァ地方は平地が多く、土地も肥沃なように地平線の彼方まで広大な田畑が広がっている。羊や牛、馬等の家畜が放牧されてのんびりと草を食んでいる風景はニューヨーク州の牧羊地帯を連想させる。また起伏の多い丘陵地帯のよく手入れされた小麦畑は北海道の美瑛地区の光景とも重なるものがある。一面に葡萄が植えられている田畑はフランスの田園風景を連想させる。

今まで世界各地を訪問して農村地帯はさういふ見えてきたが、知らず知らず歴訪地の光景と比較しながら見ている自分があるの気が付いて驚いたりする道中であつた。単調な光景に見飽きたのか居眠りをして同行者が多い中で移り行く景色を飽かずに眺めている自分には少し他人とはずれているのかな等と思いつつも眠たくないのだから景色を眺めているしか術がない。それはともあれ、この地方の農家の佇まいや田畑の様相は豊かに見える。

やがてヤシの市内へ到着し、チャウシエスク大統領がそのペランダで演説したこともあるという統一広場に面したトレインホテルで昼食を摂った。ここでは文化宮殿までバスで運んで貰い、目抜きの大通りをトレインホテルまで約1時間散策した。静かな佇まいで中世の由緒ありげな建物が立ち並び美しい街である三聖人の教会、メトロポリタン教会、貴族の館等では立ち止まり外観見学をしてヤシ市街の観光を終

え再びバスでトゥルチャを目指して長丁場の移動が始まった。

途中、ゲオルゲ公が三兄弟教会をもデルにして創建したといわれる要塞僧院に立ち寄りこれを見学した。男子修道院である。ここにある公衆便所はひどい代物で中国の山村を思い出し、密かに裏へ周り込み青空トイレを満喫した。

ドウルチャへ行くためにはドナウ川を渡るために短時間フェリーボートに乗らなければならぬ。フェリーボートは1時間毎の運航なので17時のフェリーに乗船する計画で本日の旅程は組まれている。道路渋滞に巻き込まれたり、小休止で時間をロスしたりするともなかった。バスは快適に走行していた。

ところが市街地の中でもないのにバスが突然急停車してしまった。時計は5時に40分前である。フェリー乗り場の近くまでできていた時間帯である。すわ何事かと運転手の方へ視線を転じると黄色いジャケットを装着したボリスが二人バスの前に立ちはだかっている。パトリールカーは道端に駐車してある。どうやらスピード違反を犯してしまったらしい。

運転手が降りていき警察官にしきりに談じ込んでいたが、パトカーのところにまで連れて行かれて調書を取られている。時間はあつという間に飛んで行き20分程がまたたく間に過ぎてしまった。どうも五時のフェリーには間に合いません。いやがて運転手が解放されて帰ってきて慌ただしくバスを発進させた。乗り

合わせた一同はそれぞれにひそひそ話で一時間船着き場で過ごす方法を相談している模様である。

丁度時計の針が5時を示したところで船着き場に到着した。フェリーボートにはまだ乗用車が何台か乗り込んでいる最中であつた。船内には車がぎつしり詰め込まれて大型バスの入りこむ余地はなさそうに見える。運転手は現地ガイドと一緒にフェリーまで交渉にでかけた。一同が固唾を飲んで見守る中を運転手が笑顔で帰ってきた。フェリーでは車が少しづつ移動してバスの乗り入れられる場所の確保に動き出したようである。出来上がった空間にバスが滑り込んでフェリーは所定時間に約10分遅れて出航した。15分程の航海で対岸に着いてしまった。

船着場のすぐ近くのホテルに投宿した。顛末を聞いてみるとフェリーには先着順に乗船するので積み残されないように一刻も早く船着場に到着したくて運転手はスピードをあげたらしい。そこを運悪くパトカーに捕まってしまう罰金を10ドル個人負担で払わされることになったというのであつた。

ホテル専用の船着場から専用船に乗り込み、ドナウ川の支流であるドウルチャ支流のクルーズが始まった。ドナウ川と黒海に挟まれた湿地帯はヨロツパ最後の秘境といわれ、野生動物の宝庫といわれるところである。運がよければペリカン等を見ることができるといふことであつた。



ドウルチャ支流の川辺の漁師の苫屋



メトロポリタン教会



ステュヴァツァ寺院



モルドヴァの僧院



相変わらずのんびりと往来していた。  
途中スローボーズヤという町のレストランで昼食を摂ったときデザートのアイスクリームに線香花火が仕掛けられていたのは一興であり旅の締めくくりとして印象に残るもてなしであった。  
ブカレストでは余裕時間を消化するため、自由市場を見学した。自分で作った野菜類を並べて売っている農民達の姿にも心なしか自由化した経済社会の中で豊かな生活を築いている農産物の姿にも心なしか自由化した経済社会が享受している自由のありがたさを噛みしめているように見えた。野菜類が多く並べられているが、何故か大根だけは姿が見られなかった。そして今回の旅行期間を通じて40回程の食事でもついで大根の姿を見かけなかった。

が、実際には鳥を少々見ることができただけでマングローブのように生い茂る原生林の中を静かに航行するクルーズは単調極まりないものであった。その中であって漁師達が粗末な苦屋を建てて仮住まいをしている近くに放し飼いでいる飼犬が対岸の岸を船の進行方向へどこまでもついて来るのが僅かに無聊を慰めてくれた。パンを投げてやると川の中へ飛び込んで取りに泳いでくる姿はいじらしくさえ思えた。また環境条件の厳しい湿地に芦葺きの粗末な苦屋に仮住まいして漁に勤しむ彼等の貧しい生活のことを考えていた。  
このクルーズ中、ハーモニカの上手な人が居て演奏し、船旅の抒情を慰め、かつ高めて下さった。リクエストに応じて、軍歌やら懐かしのメロデーやらしきりに熱演をして下さったが、そのうち帽子を持って御祝儀を集めようとする女性が現れた。  
彼女は運転手がスピード違反で罰金を個人負担するのは可哀そうだし、我々としても彼の熱意に対して感謝の意を具体的に表したいから心ある方は協力戴きたいとの口上で聴衆の間を廻り出したのである。この善意の行為に一同異論のある人もなく進んでなにがしかの札やら銭が競うように投じられた。  
運転手の罰金はカバールしてあまりある金員が集められ、添乗員から運転手に手渡して貰い大変喜ばれた。国境を越えて心と心がつうじあう心温まる出来事であった。  
かくして今回の旅行は終盤を迎えた。  
朝はゆっくり起き出してブカレストまでの長い移動の一日であった。  
道端で道路脇に若者が座って通りかかる車に対して両手を広げて大きさを示しているのを目撃した。ガイドの説明ではその大きさの魚を持っていくが買わないかというアピールだということであった。そして道路には荷馬車が

ギリシャの旅 アテネ、ボロス島、イドラ島、エギナ島、エピダウロス、ミケーネ、デルファイ、メテオラ

二〇〇〇四月一七日～四月二五日

未明に空港からバスでアテネ市内に入り、最初に目に入った古代遺跡は、ライトアップされたゼウスの神殿の柱群である。現在は柱が十五本しか残っていないが、かつては百四本のコリント式の列柱で支えられた巨大な神殿が建てられていたところである。そして現在のアマリアス大通りに面してハドリニアヌス帝の門がかつての威容を誇るかのようになっている。このゼウスの神殿はアテネの僭主ペイシストラトスが紀元前五一五年に着工したが、彼の失脚とともに中断していた。その後紀元前一七五年にシリア王国のアンテオコス四世が再び着工したが彼の死とともに神殿工事もまた挫折してしまつたという経緯がある。このいわくつきの神殿を一三二年に完成させたのがローマ五賢帝の一人に数えられるハドリニアヌス帝（一七〇～一三八）なのである。

ハドリニアヌス帝の建てたゼウスの神殿はコリント様式で、二重周柱式（長い側に二翼二列の柱がある）になっており、前後正面には八本の柱が三列に置かれていた。この巨大な神殿はコリント様式最大の建築物で当時の人々から絶賛されたものであつた。コリント様式は柱頭にアカンサスの葉の飾りを備えていることが特徴とされる。聖体安置室内には金と象牙で造られたゼウスの彫像が置かれ、また神域内にはハドリニアヌス帝の像が四体置かれていたという。

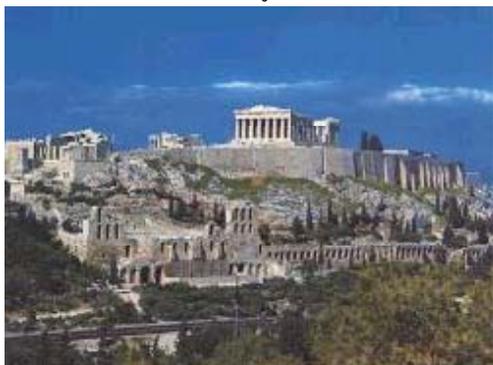
祭神のゼウスはギリシャ人にとって、神々と人類の父であり、最高の支配者であり、自然現象（雨、光、雷）を司る神でもあつた。彼は人々の運命を司り、正義を保護し、全般的に人類の存在を見守つていた。ゼウスは至高の神性であり、完全な倫理であつた。

暫しの快眠を貪つた後、正午からアクロポリスの見学に出掛けた。今日はたまたまパナテナイア祭と言つて四年に一度の祭日だそうで、アクロポリスは多くの観光客で賑わつていた。アクロポリスの入り口まではオリーブの樹木の生い茂る林間の勾配の小さな女道を通つて行つた。

ギリシャ古代遺跡のハイライトである「アクロポリス」とは「高い丘の上の都市」という意味で、古代には神殿が建てられていた聖域である。更に都市国家（ポリス）防衛の要塞として二重の役割を果たしていた場所でもある。

アクロポリスへの入り口は丘の西端にある。参道の階段を登つていき前門に向かつて右側を見上げると美しいイオニア式の柱を東西に四本ずつ持つ小さな美しいアテナ・ニーケの神殿が建っている。紀元前四二四年に完成されたもので、別名「翼なき勝利の女神」の神殿と呼ばれている。戦いで常勝を願つたアテネ市民は勝利の女神がどこへもいけないように翼を切り落としてこの神殿に祀つたと伝えられている。

参道を登りきる時を通る建物がプロピュライアと呼ばれる聖域入り口の正門であるが、左に北翼、右に南翼の建物と組み合わされている。しかし、今は何れの建物も屋根が落ちて柱列と壁面だけしか残っていないが、中央の建物の柱はドーリア式で左右のものはイオニア式である。ドーリア式は柱に溝があるだけで何の飾りもなく剛健な重量感を受けるのに対してイオニア式は柱頭に渦巻きの飾りを持ち柱にも繊細な優雅さを感じ



アクロポリスの丘

じさせる。

正門を通り抜けると目前にバルテノン神殿がドリア式の石柱に囲まれて雄大な景観をつくり出している。アテネの守護神アテナを祀ったバルテノン神殿は大理石で出来ており横三十一m、縦七十m、柱の高さ十mの威容は市内のいたる所から眺められる。この神殿は幾多の変遷を経て起源前四百三十八年に完成したと考えられている。現在では柱と梁だけしか残っていないが往時には建物全体が芸術性の高い数多くの彫刻や浮き彫り（レリーフ）で飾られていたのである。レリーフや破風の像の一部はアクロポリス博物館や大英帝国博物館に収蔵展示されている。またバルテノン神殿の北側にはアクロポリスの中でも最も聖なる場所である多くの神々の家であるエレクトイオンが建っている。この建物も屋根が壊れて無くなっているが、目をひくのは柱代わりに使われている五人の少女の彫像でカリアテイデイスと呼ばれている。カリアテイデイスは、頭にイオニア式の伝統的なキーマの装飾で飾られた籠を載せ、その上に正面の屋根がのっている。踵まである衣服を着て土台の上にしつかりと乗っているにもかかわらず、足を僅かに曲げたその動きは、支えている屋根の重さを全く感じないかのような、優雅さと淑やかな美しさを表現している。



エレクテオン



バルテノン神殿

エ

街が果てし無く広がっているように見える。北東にはリカピトスの丘が一際高く聳え立っているのも手にとるように見える。アテネ市街は予想していたよりは遙に大きな都市であった。手元の手帳の控えをみるとアテネ市の人口は三百三万人と記されている。アテネ市はギリシア国の人口が一千六十万であるから国民の三割が住む大都会であることに納得のいく眺望であった。ギリシヤ人ガイドのカテリーナさんの説明によればアテネで生活するに最低月四万円必要であるという。ちなみにギリシヤの一人当たりGNPは九九年の統計で年間一万一千六百四十US\$であり、日本のそれは九七年の統計で年間三万八千六百六十US\$である。

翌日はピレウス港から観光船のエルメス号に乗ってポロス島、イドラ島、エギナ島の順番でエーゲ海の島巡りをした。ポロス島は小さな島で時計台がある島である。島からの風景を楽しむ所謂風光明媚な場所であるに過ぎないが、富裕階級が別荘を構えているリゾート地である。ここでは朱色の屋根と白壁が特徴である。

次にイドラ島へ渡った。この間エルメス号で魚のくずし身とチキンの昼食を摂り、葡萄酒の搾りかすから醸造するウヅという酒を飲んだ。これは水を入れるとカルピスのように白濁する酒で松脂を加味してあるので独特の香りをもっている強い酒である。イドラ島も富裕階級が別荘を建てて住んでいる水と車のない島である。



ポロス島

乗船場にはポニーが数頭用意されていて観光客を乗せて馬子が手綱をとり島内をボクボク巡回していた。島民は雨水を貯めて飲料として馬子が手綱をとり島が積んでくる水に依存しているという。この島の中を小一時間あてもなく路地を散策した。島の教会へも入ってみたが、構内はかなり広くギリシヤ正教であった。ギリシヤ正教の特徴は偶像崇拜は認めないが

聖人や聖母を描いたアイコンという絵を飾るのが特徴である。絵は平面的であるから偶像とは言えないという解釈なのである。面白くへ理屈だと一人ほくそ笑んでいた。

最後のエギナ島は半漁半農の島でピスタチオの木が沢山植えられていた。ここではオプシヨナルツアに参加してドーリヤ式アフィア神殿を見学に行った。これは紀元前六世紀末から五世紀初めに建てられた神殿でアルカイック時代の神殿の中では最も優れた建築の一つと言われている。三二本あった柱の内、今は二本だけが残っておりエギナ島で産出する石灰岩で造られている。今日の日程はこれで終わり、アテネのホテルでの夕食はムサと呼ばれるギリシャ料理を堪能した。ムサは馬鈴薯と茄子と魚のすり身を重ねて蒸したもので淡白な味である。

次の日からアテネを離れて、エピダウロス、ミケーネ、デルファイ、メテオラとそれぞれの遺跡や名所を駆けめぐって三日振りにアテネへ戻り、国立考古学博物館を見学した。その日はギリシャ正教の復活祭で教会は混雑しており、その影響でここにも人々が溢れかえっていた。この博物館は五百年前に建てられたもので白い列柱を沢山持ち正面から見ると横に細長い建物である。ここには先史時代（前一万年）前十六世紀）からミケーネ時代（前十六世紀）前十二世紀）を経てローマ期（前三十一年）千四百五十三年）までの貴重な展示品が並べられている。駆け足で有名なものだけ拾いながら観賞したがその幾つかを記してみると、  
「先史時代の「竖琴を弾く人物像」、「フルートを吹く人物像」、「ミケーネ時代の「黄金のマスク」、「黄金の杯」、「印章石」、「ポセイダンのブロンズ像、馬に乗る少年のブロンズ像ディアドウメノスの像、パルテノン神殿のアテナ女神像等がある。」

ギリシャ神話やギリシャの歴史を勉強して再度訪問してみたい魅力的な博物館である。

次にリカピトスの丘へケーブルカーで登った。ケーブルカーは予想に反してトンネルの中を登っていくだけなので周囲の見晴らしは全然きかなかった。しかし、ケーブルカーから降りた途端に、四囲にアテネの市街が広がっており素晴らしい展望であった。アクロポリスの丘やオリンピック競技場の全景が手にとるように見渡せた。頂上にあるセント・ジョージという名の小さな教会には今日の復活祭に祝福を受けるためお参りをする信徒が正装して詰めかけていた。教会内では敬虔な老若男女の信者達が神父から月桂樹の葉とフエニックスの葉で作られた十字架を恭しく授けられ十字架を切っていた。

続いてスニオン岬までポセイダンの神殿を見学するため長駆バスで走行した。岬には所狭しと観光バスが詰めかけ、岬の突端には十五本のドーリヤ式円柱を白く輝かせて神殿が建っていた。祭神のポセイダンは海の神とされ、地震の神や川の神であったが、この神を崇拜する人々がギリシャへ侵入してからのちに、その領域が海に及び、のちには主として海の神になったものと考えられている。この地の神殿はアテネのパルテノン神殿より数年後に建てられたと言われている。夕焼けが白い大理石と映えて美しいこと有名であるが、日没が午後八時半頃なので、残念ながら時間が見ることができなかった。夕食はアテネ市内のブラカ地区のタベルナ（居酒屋）で民族舞踊を鑑賞しながらギリシャ料理とワインに舌鼓を打った。ギリ



ポセイダンの神殿

ある。司会者の巧みな誘導に釣られて舞台上がり年齢を忘れて踊りに興じて



イドラ島